

科目名	生理学実験	科目分類	<input type="checkbox"/> 基礎教育科目 <input checked="" type="checkbox"/> 専門教育科目
		開講年次	<input type="checkbox"/> 卒業必修 <input checked="" type="checkbox"/> 栄養士必修 <input type="checkbox"/> 選択 <input type="checkbox"/> 1年 <input checked="" type="checkbox"/> 2年
英文表記	Experiments in Physiology	開講期間	<input type="checkbox"/> 前期 <input checked="" type="checkbox"/> 後期 <input type="checkbox"/> 通年 <input type="checkbox"/> 集中
ふりがな	ひろかわただお	授業形態・修得単位	実験・1単位
担当教員名	廣川忠男	実務家教員担当科目	
授業のテーマ	実験を通して講義で学んだ知識を確認するとともに、精度の高い結果を目指して真剣に取り組む態度を養う。		
授業概要	栄養学を学ぶうえで、生理学・生化学基礎学として重要な分野であるが、特に栄養素の性質や体内における代謝については講義だけでは理解しにくい部分がある。本実験では、各種栄養素の定生定定量および代謝の触媒として働く酵素の性質、また緩衝液の性質や血液尿成分の分析などを取りあげる。講義で学んだことを実際に自分の目で確かめ、理解することを目指して実施したい。		
到達目標	①実験の目的を理解し、精度の高い結果を目指して真剣に取り組む態度を身につける。 ②実験で得られた情報をまとめ、解析し、報告する力を身につける。		
授業時間外の学習	事前にプリントを配布するので、授業の前にプリントを精読し、実験の目的・手順を予め学習して臨むこと。事後のレポートの作成は、実験結果をよく吟味して考察すること。		
履修条件	解剖学、生理学、栄養学、生化学の授業を履修していることが望ましい。		
授業計画			
第1回	テーマ：ガイダンス（実験項目／諸注意／準備物／手順）		
第2回	テーマ：唾液中の無機質の検出（定生定定量/Ca/Cl/P/S/ロダンイオン）		
第3回	テーマ：健康飲料中の成分検出（定生定定量/糖質/タンパク質/ビタミンB1/ビタミンB2）		
第4回	テーマ：酸塩基平衡と緩衝液（水素イオン濃度/酸塩基平衡/緩衝液とその調製法）		
第5回	テーマ：緩衝液の性質を調べる（酢酸緩衝液/酸アルカリの添加および希釈の影響）		
第6回	テーマ：尿の一般的な性状・尿中成分の定量（尿検査/尿比重と固形成分量/クレアチニンの定量）		
第7回	テーマ：酵素実験法の基礎（反応速度の測定法/酵素実験を行う時の諸注意）		
第8回	テーマ：唾液中アミラーゼ活性の測定（唾液アミラーゼ/アミラーゼ価/ストレス指標）		
第9回	テーマ：酵素の反応速度I（検量線の作成）（マルトース標準液/発色剤/比色定量/検量線）		
第10回	テーマ：酵素の反応速度II（pH依存性）（β-アミラーゼ/デンパン/緩衝液/比色定量/最適pH）		
第11回	テーマ：酵素の反応速度III（温度依存性）（β-アミラーゼ/デンパン/温度別反応速度の経時的変化）		
第12回	テーマ：酵素の反応速度IV（基質濃度依存性）（β-アミラーゼ/デンパン/最大速度/ミカエリス定数）		
第13回	テーマ：動物組織からの簡易DNA抽出法（鳥レバー/食塩水/エタノール）		
第14回	テーマ：血清タンパク質濃度定量・A/G比測定法（ウシ血清/アルブミン量/比色定量/塩析法/A/G比）		
第15回	テーマ：血清コレステロールの定量（ウシ血清/HDL-コレステロール/比色定量）		
第16回	定期試験		
テキスト	使用しない。プリントを配布して進める。		
参考文献・資料	適宜関連する参考図書を紹介していく。		
成績評価の方法	出席回数が規定に満たなかった場合及び授業料その他納入金等の全額を納めていない場合は試験を受けることができません。すべての実験を行い、それぞれに関するレポートを必ず提出することを合格の条件とする。実験出席態度（30%）、レポートの内容（30%）および定期試験の結果（40%）によって総合的に評価する。		
成績評価基準	秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69～60点)、不可(59点以下)		
オフィスアワー	1年生：木曜日、16:10～18:00、 2年生：月曜日、10:30～12:00		
受講生に望むこと・受講のルール	欠席した実験については、冬季休み中に実施する補講実験を必ず受講すること。 受講にあたっては、常に実験の目的と意味を考えたが、積極的に取り組むことを期待する。		